

第87図 遺構外出土の遺物(2)

第7節 遺構外出土の遺物(第86・87図、PL37・39・40・41・42)

表土、包含層、攪乱土からも膨大な量の遺物が出土した。これらの中から各時期の特徴を示すものを選別して第86・87図に図示した。ただし、須恵器壺284、須恵器甕289など遺存度の高い個体については、本来は遺構に伴っていた可能性もある。

注目されるのは、C5グリッド表土から出土した土偶の脚部片259である。形態的な特徴は、東海地方を中心に分布する「今朝平タイプ」の土偶に類似する。土製品260は縄文が施されていることから縄文時代の遺物と考えられるが、部位や器種は不明である。

古墳時代前期の遺物として、甕273、鼓形器台274、275を図示した。ただし、古墳時代前期・中期の遺物は、他の時期と比較すると非常に少ない。

土器以外では、石器、鉄製品の他に玉作関連遺物が出土している。J4はC5グリッド表土出土の翡翠の原石である。縁辺部に施溝痕が認められ、勾玉の未成品である可能性が考えられる。翡翠原石は同グリッド表土からもう1点出土しており、それについて蛍光X線分析を行った結果、糸魚川産と判定された（第4章第4節参照）。（君嶋）

第8節 鉄関連遺物（第88～95図、第9・10表、PL.45～57）

今回の調査では、鉄滓、鉄塊系遺物、炉壁、鉄製品、羽口など鉄生産に関連する遺物が約600点、重量にして約98kgが出土した。これら鉄関連遺物について、出土遺構および種類毎の点数と重量を「鉄関連遺物集計表」（第9表）にまとめた。また、鉄製品の全点、および鉄製品以外の遺物のうち代表的なものを「鉄関連遺物構成図」として図示した（第88～90図）。構成図に掲載した143点の遺物については観察表を作成した（第10表）。

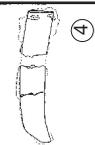
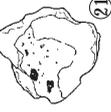
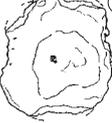
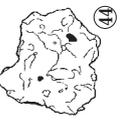
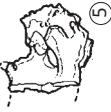
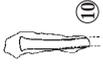
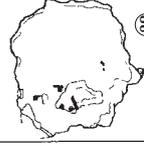
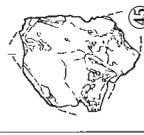
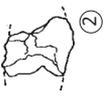
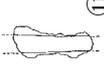
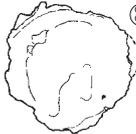
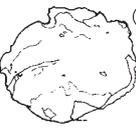
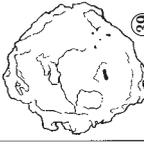
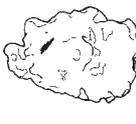
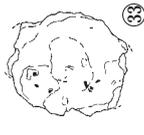
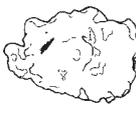
鉄製品の実測図は各出土遺構の項に示したが、鉄滓、鉄塊系遺物、羽口など鉄製品以外の実測図については、本節にまとめて掲載している（第91～95図）。また、今回は諸般の事情から金属学的分析を行えなかったが、将来分析を行う機会に備えて、分析対象候補試料を13点抽出し、「仮分析」を付した^註。

これらの時期については、遺物自体の特徴および出土遺構から判断すると中世初頭（12～13世紀）を中心とし、一部に7世紀代まで遡るものを含むと考えられる。また、表土中など遺構外から出土した鉄製品の中には、中世以降の新しい時期の遺物が混入している可能性もある。

遺構別にみると、最も多量の遺物が出土したのは12世紀代の溝であるSD7である。遺物は埋土の上層、中層、下層に分けて取り上げたが、各層位間で特に組成の差は認められない。ただし、これを掘立柱建物跡や土坑出土の遺物と比較すると、その組成に大きな違いがある。すなわち、SD7出土遺物のほとんどが椀形鍛冶滓で占められるのに対し、その他の遺構では鉄製品や鍛冶滓、鉄塊系遺物が多い。このことから、大型や中型の椀形鍛冶滓のみが選別されてSD7に廃棄されたことが推定され、本遺跡での鉄生産が組織的に行われていたことが窺える。また、今回の調査では鍛冶炉等の遺構は検出されていないが、SD7での出土位置が東端寄りに集中していることから、2区南側の調査区外に鍛冶炉が存在する可能性が極めて高いものと想定される。

出土した鍛冶滓については、表面観察のみの所見であるが、特大や大型の椀形鍛冶滓については精錬鍛冶工程の所産と考えられよう。一方で、羽口や炉壁をも含めて、製錬工程と評価できるものは見出せない。SD7出土の椀形鍛冶滓には含鉄のものが少なく、ある程度熟練した工人が生産に関わったと考えられる。また、鍛冶滓の大きさや形状は多様であり、二段椀形鍛冶滓も出土していることから、複数の鍛冶炉が存在したこと、複数回の作業が行われたことが窺える。（君嶋）

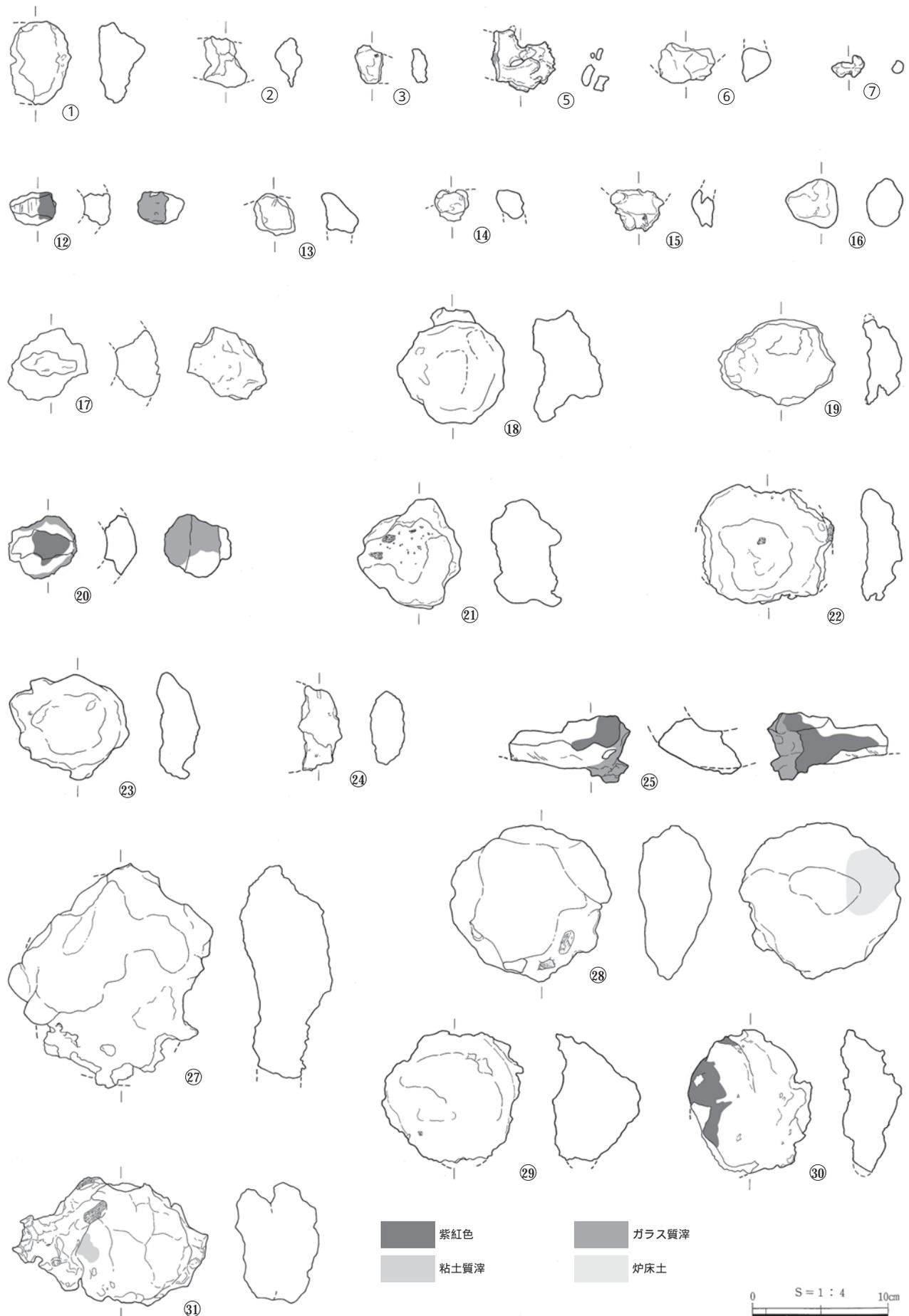
【註】鉄関連遺物の整理は、穴澤義功氏の指導の下、君嶋、西川、山根が行った。なお、本節を含め鉄関連遺物についての記述は穴澤氏の御教示に多くを負っているが、理解に誤りがある場合の責任は筆者らにある。

SD7上層										
SI 2	SI 6	SB 1	SB 2	SD 4	SD 5	SD 7上層				錐冶滓 (含鉄)
楕形錐冶滓 (中)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	楕形錐冶滓 (小・含鉄)	楕形錐冶滓 (小・二段)	楕形錐冶滓 (中)	楕形錐冶滓 (中・上端付)	楕形錐冶滓 (小)	楕形錐冶滓 (中・含鉄)	楕形錐冶滓 (中・含鉄)	錐冶滓 (含鉄)
			H () 		 					L ()
錐冶滓 (含鉄)	粘土質溶解物 (鍛冶系)		錐冶滓 (含鉄)	楕形錐冶滓 (小)	 				楕形錐冶滓 (小・含鉄)	楕形錐塊 (含鉄)
L ()			H ()  	楕形錐冶滓 (小)					錐冶滓 (含鉄)	特L ()
	SB 1 楕形錐冶滓 (種小・含鉄)		H () 		 				楕形錐冶滓 (種小)	錐冶滓 (含鉄)
SI 3 楕形錐冶滓 (含鉄)	錐冶滓 (含鉄)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)	SD 6 鉄製品 (鍛造品)					
H () 	錐冶滓 (含鉄)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)						
錐冶滓 (含鉄)	錐冶滓 (含鉄)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)	錐冶滓 (鍛冶)						
										
										
										

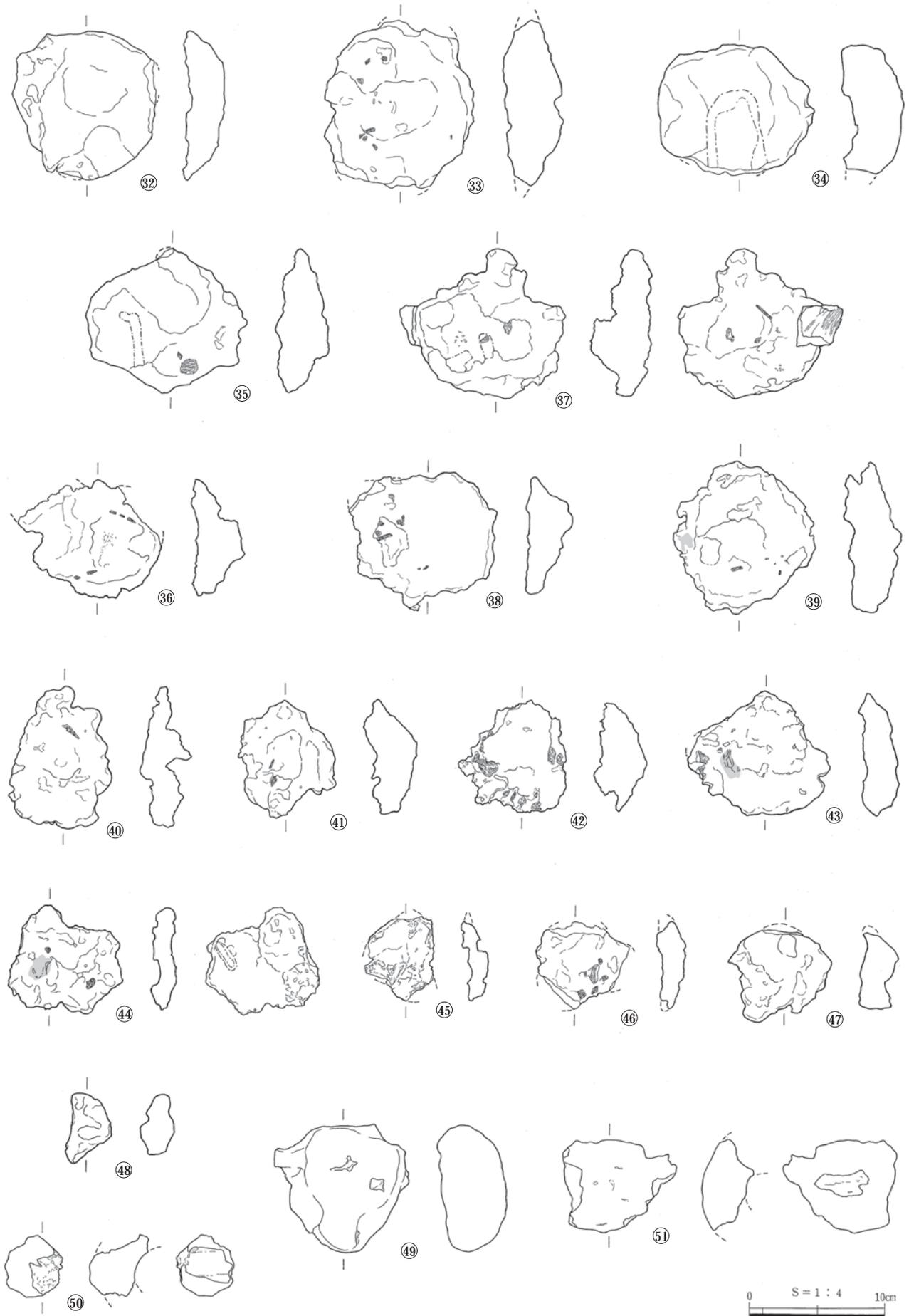
第88図 鉄関連遺物構成図(1)

第 9 表 鉄関連遺物集計表 (2)

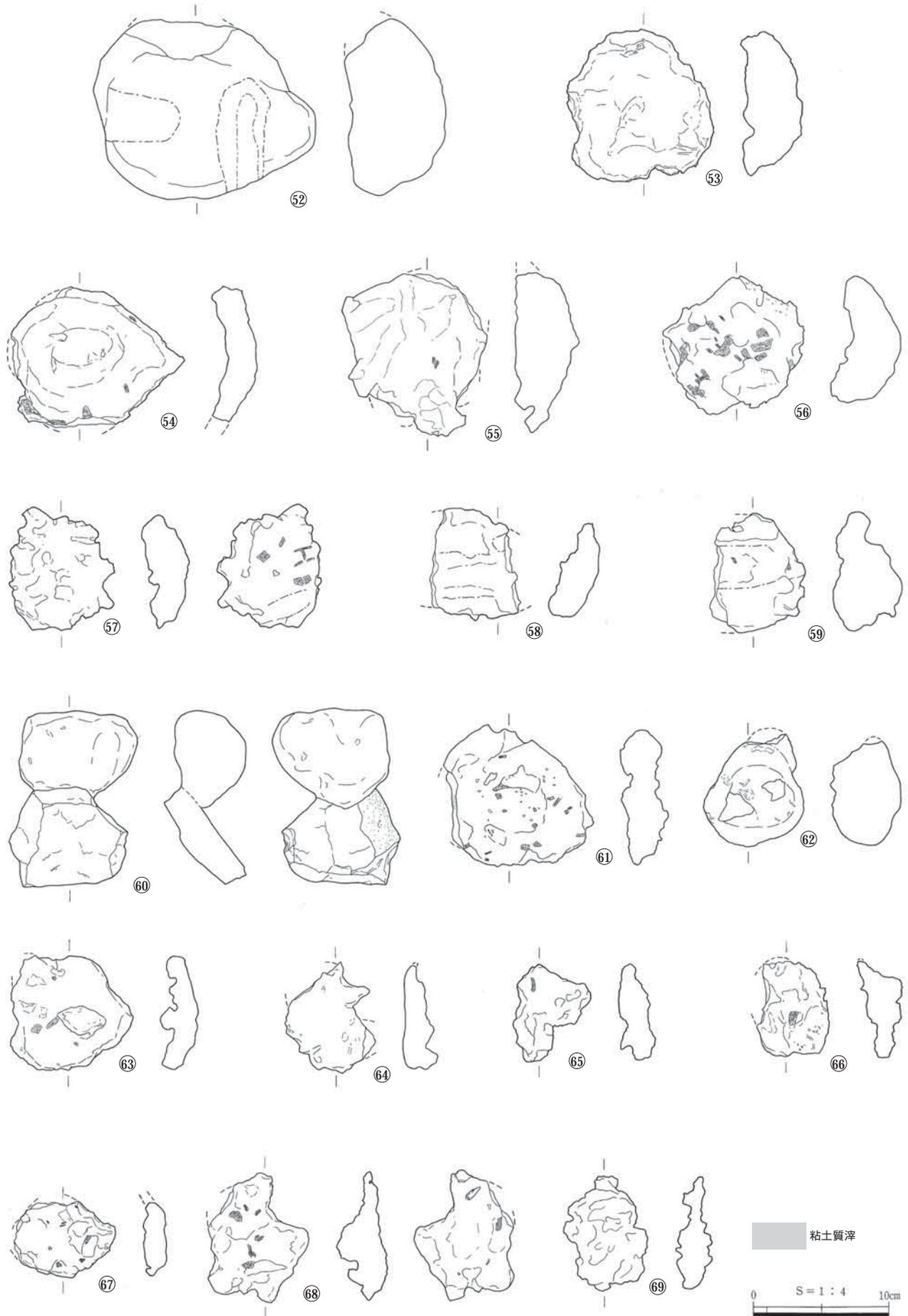
遺物名	遺物名																				
	SK6	SK7	SK9	SK11	SK12	SK13	SK14	SK15	SK18	SK20	SK21	SK22	夕小一拵	P96	P92	P110	P131	P137	P139	P140	
櫛形線治棒 (特大)	含鉄 鉄化(△)																				
	M(◎)																				
櫛形線治棒 (大)	含鉄						1点 (258.0g)														
	含鉄 鉄化(△)							1点 (21.8g)													
	含鉄 二段 鉄化(△)																				
	二段 工具痕 付皮																				
櫛形線治棒 (中)	含鉄 鉄化(△)																				
	含鉄 鉄化(△) 鉄柱付皮																				
	H(C)																				
	工具痕 付皮 付皮 綴遺物 片付皮																				
櫛形線治棒 (小)	含鉄 鉄化(△)																				
	H(C)																				
	二段																				
	工具痕 付皮 伊麻土 付皮																				
櫛形線治棒 (微小)	含鉄 鉄化(△)																				
	H(C)																				
	含鉄 L(●)																				
	含鉄 鉄化(△)																				
線治棒	含鉄 鉄化(△)																				
	H(C)																				
	含鉄 L(●)																				
	含鉄 流動棒 特L(☆)																				
櫛形線塊	含鉄 H(C)																				
	含鉄 L(●)																				
	含鉄 L(●)																				
	土器付管棒																				
鉄製品(線治品)	2点 (46.0g)																				
	1点 (4.2g)																				
	1点 (1.6g)																				
	1点 (6.8g)																				
鉄製品(線治品+時期新小)																					
鉄製品(線治品+時期新小)																					
羽口(線治)																					
粘土質溶線遺物(線治系)																					
刃先溶線遺物(時期新小?)																					
石																					
計																					



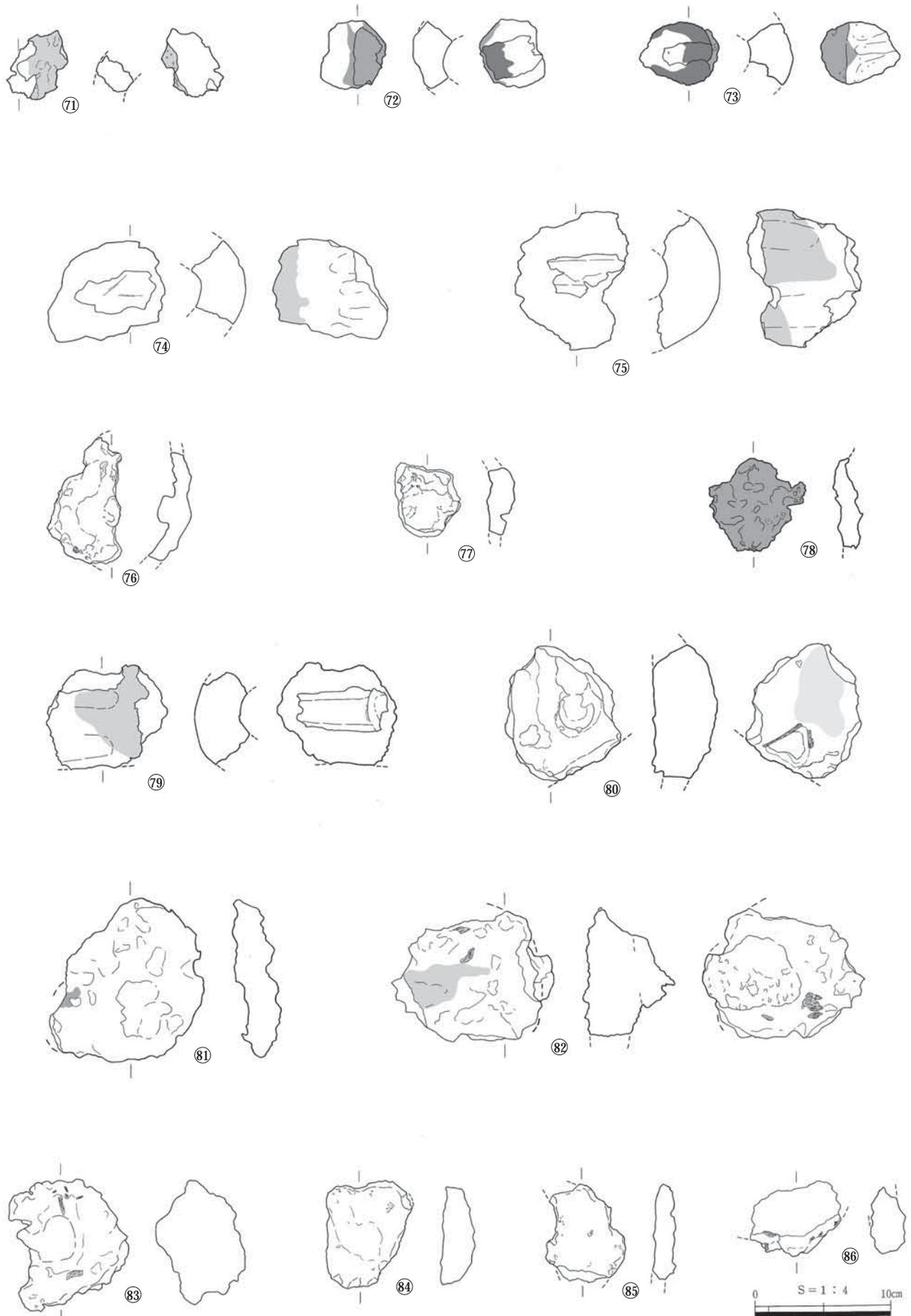
第91図 鉄関連遺物(1)



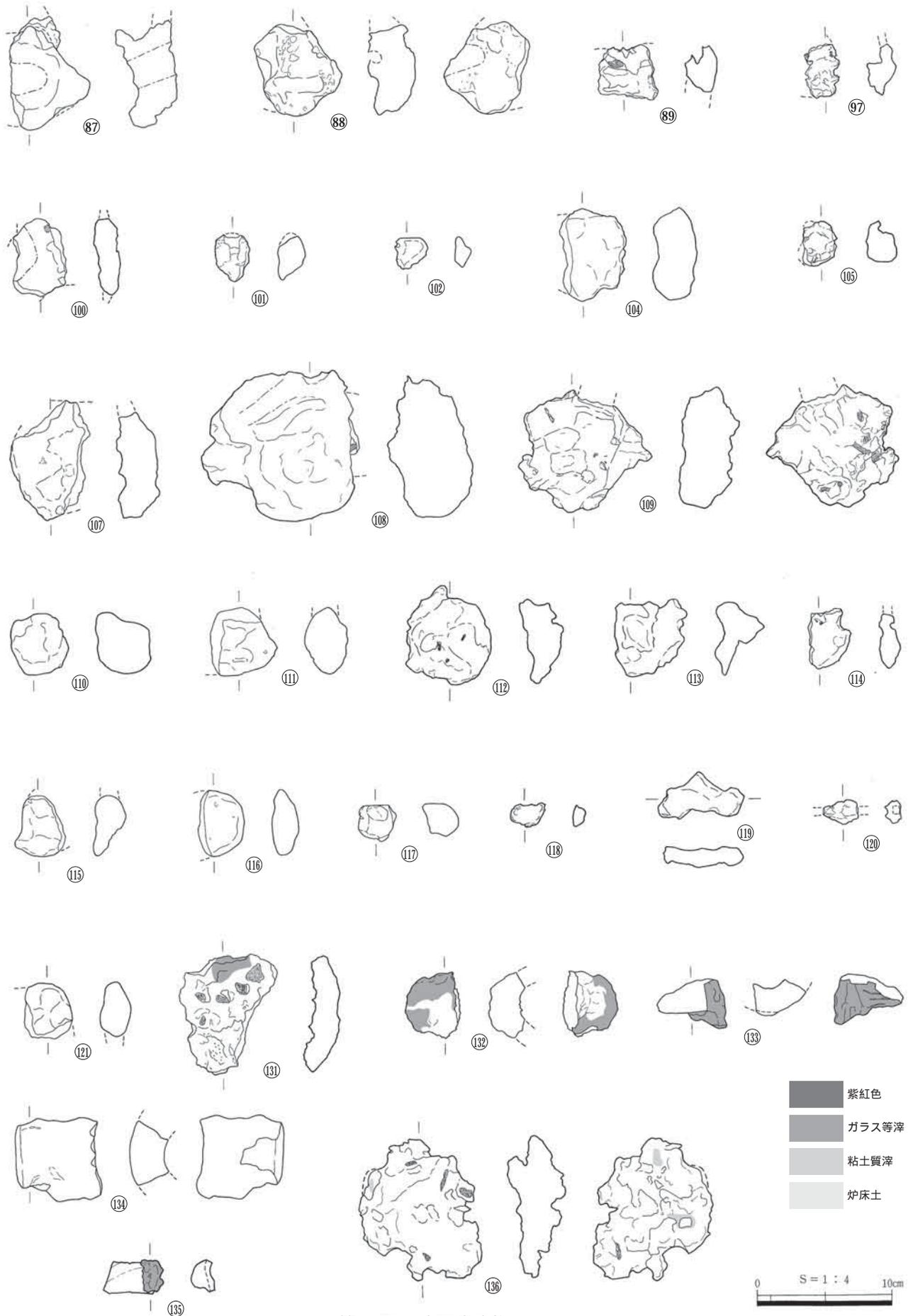
第92図 鉄関連遺物(2)



第93図 鉄関連遺物 (3)



第94図 鉄関連遺物(4)



第95図 鉄関連遺物（5）

第10表 鉄関連遺物観察表

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
	椀形鍛冶滓 (中)	SI 2	4.5	6.2	3.4	116.0	2	なし	(仮・分析No.1) 中核部から側部の破片。左側面が主破面。上面は平坦で肩部は丸味を持つ。右側部から下面は椀形で、1cm大以下の木炭痕が残る。滓は上半部が緻密で中間層にやや隙間を残す。
	鍛冶滓 (含鉄)	SI 2	3.2	3.8	2.0	19.2	5	L ()	(仮・分析No.2) 平面・不整六角形をした扁平な鍛冶滓。上下面が生きており、左右の側部が破面となる。黒錆に覆われており、上下面の各所に錆ぶくれが発達する。含鉄部は肥厚した中核部。下面はやや皿状となる。
	鍛冶滓 (含鉄)	SI 3	1.9	2.8	1.1	9.5	5	H ()	(仮・分析No.3) 平面・不整六角形をした扁平な鍛冶滓。小振りて上手側側部は下に向かい伸び気味となる。上下面が生きており、右側部から下手側にかけてが破面。上面には木炭痕が残り、下面はやや皿状。放射割れが生じ始めている。
	鉄製品 (鍛造品) 曲刀鎌	SI 6	1.4	2.8	0.3	59.0	4	錆化 ()	刀部の中程を欠損する。折り返し部は錆に覆われているが、一部の縦方向の木質痕を認める。
	粘土質溶解物 (鍛冶系)	SI 6	4.5	4.6	1.9	19.6	1	なし	(仮・分析No.4) 内面が滓化した粘土質溶解物。表面の色調は淡緑色から黒褐色。左側面が主破面。裏面に隙間が残るものの全体的には椀形となる。砂粒主体の鍛冶炉の炉床土が右寄りに残存する。色調は灰褐色。破面の一部は黒色ガラス質。羽口先に接した鍛冶炉の炉壁表面破片か。
	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	SB 1 P15	4.1	3.0	2.2	43.6	4	H ()	(仮・分析No.5) 極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上下面と下手側の側部は生きており、左右と下手側の側部が破面。上面は中央部が窪み、下手側の側部は立ち上がり急となる。含鉄部は上手側に広がりを持つ。酸化土砂がやや厚い。わずかに錆ぶくれが生じている。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB 1 P7	2.4	1.6	0.9	2.4	2	錆化 ()	横方向に不定形に伸びたごく小さな鍛冶滓。ほぼ完形品で、側部の凹凸は木炭痕のため。下面はわずかに椀形。含鉄部は中核部。
	鉄製品 (鍛造品) 刀子茎	SB 1 P18	4.0	1.6	0.4	6.0	3	錆化 ()	上部を欠損。裏面に一部木質あり。茎の先端は厚みを減じ、横一文字に終わる。
	鉄製品 (鍛造品) 釘	SB 1 P4	4.5	0.7	0.6	6.5	3	錆化 ()	上下端部はともに欠損する。断面方形で下部に行くに従い細くなる。表面に木質などの付着物は認められない。
	鉄製品 (鍛造品)	SB 1 P14	4.5	0.6	0.7	7.0	5	錆化 ()	(仮・分析No.6) 横断面形が方形となる棒状の鉄製品破片。下手側が側部と推定され、徐々に細くなることから、釘の可能性が高い。頭部は欠落している。表面の酸化土砂中にはガラス質の薄片が付着している。
	鉄製品 (鍛造品)	SB 1 P12	4.2	0.9	0.7	8.0	5	錆化 ()	逆槌状の横断面形を持つ棒状の鉄製品破片。表面には数多くの筋状の放射割れが走っている。上手側の側部は貝殻状の錆ぶくれで変形している。全体に上手側が太くなり、下手側に向かい狭まった槌状を示す。内側には酸化土砂が厚い。容器状の鉄製品の脚部分か。
	羽口 (鍛冶)	SB 1 P15	3.4	2.5	1.9	16.2	1	なし	羽口先端部の小破片。通風孔部と先端部外面の一部が生きており、残る半分が破面となる。外面は黒色ガラス質に滓化している。通風孔部には回転方向のケズリ痕が残る。胎土は粗粒をわずかに混じえる粘土質。
	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SB P9	3.0	3.1	2.7	27.0	5	H ()	含鉄の椀形鍛冶滓の側部破片。上下面が生きており、左右の側部と下手側が破面。上手側側部は元の椀形鍛冶滓の側部となる。含鉄部は上面上手寄り。外周部には酸化土砂が厚い。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB2 P16	2.4	2.2	2.1	19.4	4	H ()	上面と上手側の側部がわずかに生きている鍛冶滓片。左右の側部はシャープな破面で滓はやや緻密。結晶が発達気味。極小から小型の椀形鍛冶滓の肩部破片の可能性もあり、上手側の側部が弧状となるのが理由である。含鉄部は上面表皮寄り。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB2 P11	3.9	2.0	1.6	21.2	3	H ()	側面の半分以上が破面となったガス質の鍛冶滓片。上下面は小さな波状で1cm大以下の木炭痕が目立つ。上手側の側部の破面には気孔が数多く露出する。また中間層に隙間を持つ。上面には粉炭主体の厚い酸化土砂が残る。含鉄部は右手の中核部。
	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD1	3.8	3.6	2.6	39.0	4	H ()	全面が酸化土砂に覆われた含鉄の椀形鍛冶滓片。上下面は生きている可能性が高く、側面は破面の可能性がある。酸化土砂のため表面状態は全く不明。横断面形は右手に向かい薄くなるため、こちら側が肩部寄りか。含鉄部は右上面寄り。
	羽口 (鍛冶)	SD1	5.8	5.4	3.3	65.0	1	なし	羽口先端部寄りの側部破片。通風孔部と外面の一部が生きており、側部は破面主体となる。右側部は破面と滓化した面が混在しており一部が割れたまま使用されたものか。外面は薄く滓化発泡しており、半分以上が風化のため灰白色となる。胎土は多量のスサを含む粘土質。8mm大の石も含まれている。
	椀形鍛冶滓 (小・二段)	SD4	7.9	8.7	5.1	277.0	5	なし	上面に完形の椀形滓が残る二段椀形鍛冶滓。下面の滓は中核部のみが生きており、側面は破面と自然面が混在する。厚味は上下とも近似する。上面の滓は不整円形で右側に向かい厚くなる。上面は流動状で中央部と右上手側が槌状に窪む。工具痕の可能性大。側面から下面には木炭痕が目立つ。下面の滓は1cm大以下の木炭痕が各面に目立ちややガス質となる。上下滓の中間層には木炭をかみ込んでいる。
	椀形鍛冶滓 (小)	SD4	8.6	6.4	2.3	177.0	6	なし	平面・長手の不整楕円形をした小型の椀形鍛冶滓。肩部に主破面が連続するが、滓の全体観は生きている。上面は緩やかに凹み、側面から下面は皿状の外観を残す。下面右端部は一段窪み、酸化土砂が厚い。それ以外は木炭痕に覆われており、部分的に灰黒色の鍛冶炉の炉床土が残る。滓はやや緻密で木炭のかみ込みも認められる。
	羽口 (鍛冶)	SD4	5.0	4.7	2.4	49.0	1	なし	羽口の先端部破片。通風孔部と外面に加えて右側の先端部の一部が生きている。通風孔部の内面は先端から3.5cmまで紫紅色に被熱。右側の先端部は黒色ガラス質に滓化しており、外面の半分以上が同じガラス質に覆われている。胎土はスサを含まない緻密なもの。角張った石粒や砂粒が混在する。
㉑	椀形鍛冶滓 (中)	SD5	7.6	8.2	5.2	247.0	3	なし	二段気味の椀形鍛冶滓破片。酸化土砂が側面から下面に厚く、不明点も多い。上面の滓は上手側が欠落しており、ガス質で密度が低い。上面は平坦気味で木炭痕が並ぶ。上下の滓の中間層は木炭痕や木炭のかみ込みが激しく、不規則な段をなす。下段の滓は酸化土砂のため不明。上下の滓は大きさ自体は小型に属する。
㉒	椀形鍛冶滓 (中)	SD5	9.8	8.9	3.0	410.0	6	なし	中型の椀形鍛冶滓。肩部の3箇所小破面が残るが、ほぼ完形に近い。上面が中央に向かってくぼみ、表面には木炭痕が浅く残される。横断面形は左側が薄く、右側が厚くなっており、肩部や側面の木炭痕が右側に目立つ。下面は皿状でわずかに木炭痕が残るが酸化土砂のため不明点が多い。比重は高く滓質は緻密。下面の酸化土砂中には靑光りする鍛造剥片が2点含まれている。左右逆の可能性もあり。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
㉓	椀形鍛冶滓 (小)	SD5	8.8	7.8	3.0	262.0	5	なし	完形の小型の椀形鍛冶滓。表面の酸化土砂が厚く、表面状態は不明。上面が浅く窪み、肩部は厚く丸みを持つ。下手側と左上手寄りの側部が部分的に突出する。比重はやや高い。
㉔	椀形鍛冶滓 (極小)	SD5	3.2	6.3	2.5	52.0	5	なし	極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。左側部がシャープな破片となる。下手側の表皮が剥落する。肩部はまとまりをもち、側面から下面にかけてもしっかりしている。表面には薄い酸化土砂が残る。
㉕	羽口 (鍛冶)	SD5	8.9	5.0	2.8	152.0	1	なし	羽口の先端部から体部にかけての破片。先端部は薄皮状の黒褐色の滓に覆われており、あご部には滓が突出する。通風孔部の径はやや大きめで、先端部寄りの内面には滓が2mmほどの厚みで固着している。通風孔部の整形痕は斜め回転方向と長軸方向の二者あり。外面は灰色に薄く滓化しており、先端寄りには発泡気味。胎土は多量のスサを混じえた粘土質。胎土の練りはややあまい。
㉖	鉄製品 (鍛造品) 鋤先?	SD6	9.0	3.8	0.2	31.4	4	錆化 ()	下端部は刃部状に薄くなり、右側上端部はわずかに反る。鎌もしくは鋤先の可能性が考えられる。
㉗	椀形鍛冶滓 (特大)	SD7 上層	15.0	16.5	6.7	1410.0	4	なし	肩部に小破面を点々と残す特大の椀形鍛冶滓。上面上手側は酸化土砂が厚く、部分的に盛り上がる。下面中央部から上手にかけては滓が幅4.5cmほど楯状に突出しており、工具により鍛冶炉の荒れに差し込んだ滓の可能性が高い。突出部は一部二段になっている。上面は緩やかに窪み、肩部は凹凸が激しい。側面から下面は比較的きれいな椀形で、木炭痕と鍛冶炉の炉床土の圧痕が混在する。滓の密度はやや低めで、大きさの割には軽い印象を持つ。
㉘	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 上層	11.8	11.7	5.4	790.0	4	なし	上面から側面の大半が酸化土砂に覆われたまとまりのよい大型の椀形鍛冶滓。円盤状で下面がきれいな椀形に突出する。下手側の側部は小破面か。下面左半分には灰褐色の鍛冶炉の炉床土が薄く固着している。密度は高め。
㉙	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 上層	10.4	9.8	6.4	600.0	5	なし	横断面形が深いコマ形の椀形鍛冶滓。下手側の肩部に小破面を残すが、ほぼ完形品。上手側が2cmほど斜め上に突出しているのは、滓の生成段階で水平位置がずらされたためか。側面から下面は傾斜が強く、下面中央部は大きく突出する。表面には木炭痕がかすかに残る。右側面下半には灰黒色の鍛冶炉炉床土の焼き付きが生じている。
㉚	椀形鍛冶滓 (大)	SD 上層	9.1	10.7	4.3	530.0	3	なし	密度が高く全体に流動状の椀形鍛冶滓。左側部と下手側が小破面。上面は左側が傾斜し表皮が紫紅色気味となる。羽口先からの通風による酸化か。右半分は不規則な波状で、右側に向かって広がる形状を残す。側面は凹凸が著しい。下面は炉床土の圧痕主体で荒れ気味。一部に灰黒色の炉床土がかみ込む。滓内部の気孔はきわめて少ない。
㉛	椀形鍛冶滓 (大・含鉄・二段)	SD7 上層	14.5	9.6	6.2	650.0	5	錆化 ()	平面・不整形円形をした二段椀形鍛冶滓。下面は小さい破面が散在するがほぼ完形。上面の滓本体は径8.5cmほどの不整形円形で、木炭痕の目立つ滓部が左側に向かって不規則に伸びる。滓本体の上面左端部には羽口由来の滓が乗る。下面の滓は平面・不整形円形で、下手側から右側の肩部が横方向に薄く張り出す。下面は1cm前後の木炭痕主体。上下とも含鉄部が散在する。
㉜	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 上層	10.6	11.1	3.2	510.0	3	錆化 ()	平面・不整形円形をしたやや二段気味の椀形鍛冶滓。肩部に小破面が確認されるが、完形に近い。上面は短軸方向が浅いV字状に窪み、肩部は薄くなる。左側部は二段気味で中間層に1cm大前後の木炭をかみ込む。下面は中央部が平坦気味で側部の立ち上がり強い。細かい木炭痕と炉床土の剥離痕が混在し、青光りする薄手の鍛造剥片が無数に固着している。含鉄部は上面の滓側に広がっている。
㉝	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 上層	11.0	12.4	4.5	800.0	5	錆化 ()	短軸方向にやや長めの椀形鍛冶滓。肩部の半分程度が破面で途切れているが、左右方向はほぼ完形となる。まとまりのよい滓で、上面中央部と上手左寄りが小さく窪む。粉炭と鍛造剥片に加えて粒状滓が酸化土砂中に混在する。下面は木炭痕と炉床土の圧痕で、上手寄りには斜め左上からの浅い工具痕が残る。含鉄部は上面上手寄りのみ。密度の高い滓である。
㉞	椀形鍛冶滓 (大・工具痕付)	SD7 上層	11.6	9.7	4.6	790.0	4	なし	全面が厚い酸化土砂に覆われた工具痕付の椀形鍛冶滓。酸化土砂が特に厚いため、上面や肩部を中心に不明点が多い。下手側の側部が主破面。それ以外も肩部に小破面が推定される。上面は中央部が大きく窪み、下手側に向かって溝状に伸びる。この部分は工具痕である可能性が高い。滓は厚味を持ち、左側では厚さ4.5cmにも達する。下面はやや不規則で木炭と小さな突出部が各所に残る。
㉟	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 上層	11.9	10.8	3.9	474.0	3	なし	中型の椀形鍛冶滓。左右方向にやや長い不整形円形で、左半分が薄くなっている。特に左側5cmほどの範囲で1cmほど窪んでおり、その中央部に短軸方向に向かう幅7mmほどの浅い楯状の工具痕が認められる。工具痕の長さは現状で4cm。先端部は2単位に分かれている。肩部や下面はまとまりを持ちながらも、小さな突起が点在する。下面の突起は鍛冶炉の炉床部の荒れを示すものか。下面下手側にも上面と同様、かすかな工具痕が残る。
㊱	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 上層	10.6	8.8	4.0	298.0	4	なし	平面・不整形円形の椀形鍛冶滓。左上手側の肩部と右上手側が小破面。上面は左半分の凹凸が著しく、右側が浅い皿状となる。下面は木炭痕と炉床土の圧痕が混在し、凹凸がやや強い。右側の窪みには、灰黒色の鍛冶炉の炉床土が点々と固着しているが、2mm大の粒状滓の可能性もある。黒褐色の滓が酸化土砂中に含まれる。上面は左側が窪み気味。
㊲	椀形鍛冶滓 (中・土器付)	SD7 上層	12.1	11.1	4.5	486.0	4	なし	下面左側に底部糸切の土師器片が固着した中型の椀形鍛冶滓。やや二段気味で完形品。上手側肩部の発達が不均一で窪みや突出部が生じている。上面に乗る滓部は長さ8cm大で、下半の滓よりひと回り小さく未発達である。工具(幅1cmほどの丸棒状)の先端部のアタリが2箇所に残される。加えて黒色の鍛造剥片が固着している。下半の滓は肩部から底面にかけて凹凸があり、深い窪みは大半が木炭痕となる。酸化土砂がやや厚く鍛造剥片も含まれている。固着する土器も酸化土砂により固着している。土器は初殻やスサをわずかに含んだ胎土で、緩やかに外反気味の立ち上がりを持つ。混和物中にスコリアあり。
㊳	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.9	10.3	3.5	443.0	3	錆化 ()	中型のほぼ完形の椀形鍛冶滓。左側部に小破面が2箇所残る。上面は平坦気味で左側の木炭痕が強い。側面から下面は木炭痕が著しく、それに応じて凹凸も目立つ。3箇所突出部を持つ二次的な酸化土砂。含鉄部は上面上手寄り主体。滓内部にも一部木炭をかんでいる。
㊴	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.5	11.3	4.2	460.0	7	錆化 ()	中型のしっかりした椀形鍛冶滓。全体的に構成構成 ㉓に似る。上面左寄りが窪み、右側に向かって平坦化する。薄い酸化土砂に覆われており、青光りする鍛造剥片を多く含んでいる。左側部縦方向に幅1cmほどの丸棒状の工具痕が残る。側面から下面は浅い椀形で短軸方向はやや凹凸が著しい。中央寄りには灰色の鍛冶炉の炉床土の痕跡を残す。上面端部に羽口先のたれを残す。

第3章 発掘調査の成果

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
④⑩	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	7.6	10.6	3.8	283.0	5	錆化 ()	短軸方向に長手の不整楕円形をした中型の椀形鍛冶滓。下手寄りにははっきりした椀形で、上手側は発達が悪い。そのため凹凸が目立つ。上面は全体に平坦気味で中央部に向かって浅く凹む。窪みには酸化土砂が厚い。下面は上面に対応して下手寄りがきれいな椀形となる。酸化土砂が瘤状に固着する。含鉄部は上面上手寄り主体。
④⑪	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 上層	7.3	8.6	3.9	233.0	3	なし	平面形のやや乱れた完形に近い椀形鍛冶滓。不整多角形気味。右上手側が発達しており、逆に左下手側が発達不良。下面は上面に対応するかのようになり、右斜め上から左斜め下に向かって突出する。表面には木炭痕と炉床土の圧痕が併存する。滓の形成が阻害されているものか。
④⑫	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 上層	8.0	8.3	3.9	246.0	4	なし	平面・不整楕円形をした小型の椀形鍛冶滓。各面とも発達途上でほぼ完形品である。上面は下手側が発達が悪く、木炭を内部にかみ込んでいる。側面から下面は底面中央部のみが炉底部に接しており、周辺部は木炭層上で形成されている。薄く固着する酸化土砂中には光沢をもった鍛造剥片や1mm大の粒状滓が含まれる。
④⑬	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.5	9.2	3.1	295.0	4	錆化 ()	上面左側に羽口由来の粘土質の滓を残す中型の椀形鍛冶滓。左上手側の肩部が破面。下手側はきれいに発達した椀形で、右上手側は発達が悪い。SD7上層ではこのような右上手側の滓の発達の弱い資料がやや目立ち、構成No.④⑰・④⑱なども同様である。左側部がわずかに反り気味で木炭痕が目立つ。下面から側面は浅い椀形で炉床土の圧痕と木炭痕が相半ばする。含鉄部は上面下手寄りに突出する1.5cm大の範囲。
④⑭	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 上層	8.4	8.1	1.9	158.0	5	錆化 ()	扁平な小型の椀形鍛冶滓。上面左側には羽口先の脱落片が乗り、一部が風化して灰白色となっている。上面は浅い皿形で木炭痕が点在する。肩部は発達不完全で凹凸が交互に残される。下面は浅い皿形でほぼ全体が炉床土に接している。下面右上手が幅0.8cmほどの範囲で溝状に窪む。工具痕の可能性あり。滓量の少ない割には炉床に接している。椀形鍛冶滓・含鉄部は上面上手側の2箇所に残る小塊状の部分。
④⑮	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	5.1	6.2	2.0	87.0	3	なし	発達の不完全な極小の椀形鍛冶滓。肩部の4箇所は破面で左側部はやや乱れている。上下とも木炭痕が点在し、下面上手側には灰黒色の鍛冶炉の炉床土が固着する。内部にも木炭をかみ込んでいるが、滓質は緻密。
④⑯	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	6.9	6.5	2.2	108.0	3	なし	側面三面に破面を残す極小の椀形鍛冶滓。扁平で上下面の質感がやや異なる。上面は木炭痕主体で、下面には木炭痕が密に固着する。下面右端部には粘土質の滓が小さく突出する。木炭は針葉樹材主体。
④⑰	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	7.7	6.9	2.9	151.0	4	なし	下面の1/3ほどに炉床土の固着した極小の椀形鍛冶滓。左側部から上面が不規則に窪んでおり上手側の肩部が小破面となる。全体に発達途上の滓。下面下手側は全体に凹んでおり、上手側はきれいな椀形を示す。灰白色から灰黒色の鍛冶炉の炉床土が薄く張り付いている。滓質は構成No.④⑮と似る。
④⑱	鍛冶滓 (含鉄)	SD7 上層	3.4	5.3	2.6	59.0	4	L ()	(仮・分析No.10) 左右の側部が欠落したような含鉄の鍛冶滓。中核部は鉄主体で錆も進んでいる。錆ぶくれや黒錆のにじみに加えて放射割れも生じ始めている。椀形鍛冶滓を短軸方向に割り取ったような形状を示している。鉄部の割合が6割以上。表面には酸化土砂がやや厚い。
④⑲	椀形鉄塊	SD7 上層	9.9	9.5	5.1	700.0	5	特L ()	(仮・分析No.11) 酸化土砂に覆われた、厚味のある椀形の形状を示す椀形鉄塊。酸化土砂のため表面状態は全く不明。上面は平坦気味で下面は椀形となる。左側部がややえぐれた形状。鉄主体の椀形鍛冶滓、または精錬鍛冶処理の最終段階にあたる鍛冶鉄塊か。突出する酸化土砂の部分のみ磁着が弱い。
⑤⑩	羽口 (鍛冶)	SD7 上層	4.3	4.7	4.4	49.0	1	なし	羽口先端部の小破片。先端は滓化して黒色から淡緑色となっている。風化して表皮が剥離した部分は灰白色。肩部は大半が破面。通風孔部は長軸方向に向かう穿孔。胎土は短いスサや初殻を含んだ粘土質。胎土や通風孔部の整形方法は構成No.⑤⑲と類似する。通風孔部の径はやや太め。
⑤⑪	羽口 (鍛冶)	SD7 上層	8.4	6.9	3.3	176.0	1	なし	羽口の先端部寄りの体部破片。外面の成・整形は長軸方向の帯状のケズリの後にナデ。外面右寄りの3cmほどが灰色に被熱し先端側を示す。通風孔部は長軸方向の粗いナデ状の圧痕となる。胎土は多量のスサを含む粘土質で構成No.⑤⑲に似る。
⑤⑫	椀形鍛冶滓 (特大・含鉄)	SD7 中層	16.4	13.4	7.5	2100.0	3	M ()	(仮・分析No.7) 平面・不整楕円形の特大の椀形鍛冶滓。本遺跡出土品中では最大の椀形鍛冶滓で、2100gを計る。酸化土砂が厚く不明点も多いが、上手側肩部は破面の可能性が高い。上面は中央部が左右方向に凹み、羽口先の滓の窪みまたは工具痕に開くものであろう。右側の浅いV字状の窪みは工具痕の可能性が高い。最大肥厚部は左端部で、径7cmほどの丸をもつて突出している。その周辺を含めて、下面には褐色から灰褐色の鍛冶炉の炉床土が面的に張り付いている。この突出部が本来の滓の中心部で、その後には滓を左側にずらした形で滓が成長している。滓内部については酸化土砂のため不明ながら、比重の高さから緻密なものと推定される。含鉄部は1箇所だけでなく分散気味。
⑤⑬	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 中層	10.7	11.3	4.4	630.0	4	なし	平面・不整形をしたほぼ完形の椀形鍛冶滓。左側面と下手側が窪んでいるが、破面はなく自然面。上面は緩やかな波状で肩部から下面にかけてやや木炭痕が激しい。底面の三方が突出気味になっているのは炉床の工具による荒れか。酸化土砂はすべて土壌である。
⑤⑭	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 中層	12.7	10.5	3.3	522.0	7	錆化 ()	肩部に小破面を3箇所残す椀形鍛冶滓。上面は中央部に向かい緩やかにくぼみ、左側部は2.5cm大の木炭をかみ込んでいるため変形している。肩部に向かい薄くなり、部分的に二段気味の木炭のかみ込みが認められる。滓は緻密。下面は左右方向に向かう浅い樋状で、左寄りの木炭痕が粗い。含鉄部は上面上手寄りに広がりを持つ。
⑤⑮	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 中層	10.8	12.1	4.8	660.0	8	錆化 ()	短軸部と右側部の三方が破面となった椀形鍛冶滓。左側1/3は上下面とも一段凹んでおり、滓の形成が悪い。上面は全体に平坦気味で短軸方向へ向かう窪みが2箇所認められるが、酸化土砂のため工具痕かどうかは不明。左側部から見ると滓は二段気味。下手側の肩部が一部突出する。下面右側はきれいな椀形で鍛冶炉の炉床に完全に密着している。含鉄部は上面中央部から上手にかけてで、磁着は強い。
⑤⑯	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 中層	10.4	10.3	5.2	479.0	5	なし	平面・不整六角形気味の中型の椀形鍛冶滓。左側部に小破面が残る以外はほぼ完形品。上面中央部は浅く窪み、下手側はやや突出する。左側部の破面は奥に向かい3cm近く中空となっている。側面から下面はきれいな椀形で、中央部のみが鍛冶炉の炉床に接し、外周部は木炭痕に覆われている。
⑤⑰	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 中層	7.8	9.2	3.5	262.0	3	なし	上面や側面の発達の良い椀形鍛冶滓。小さな突起や木炭痕が目立つ。破面はなく完形品。右側部下手寄りにガラス質の滓が乗るが羽口下の垂れてはいる。滓は上面が二つに分かれており、左側は傾斜してしまっている。滓の形成時に突き動かされている可能性が高い。そのためか左端部が急激に途切れている。下面は浅い椀形で、凹凸はやや少ない。下面下手側には浅い樋状の工具痕が残る。重量的には262gと中型に属するが、形態的には小型品である。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑤⑧	椀形鍛冶滓 (中・工具痕付)	SD7 中層	6.7	8.5	3.8	306.0	5	なし	左右の側部が直線状の破面となった椀形鍛冶滓の中核部破片。上面の中央部が左右方向に窪み、工具痕の可能性ある。左側部の破面のみ二段気味で、中間層に木炭をかみ込む。上面右上手側には工具のアタリが小範囲に残る。短軸方向の断面形が不均一で、上手側が素直に横方向に広がるのに対して、下手側は肥厚して押さえられたような形となる。滓の密度が高い。
⑤⑨	椀形鍛冶滓 (中・工具痕付)	SD7 中層	7.1	8.9	5.1	360.0	4	なし	左側部と上手側の一部が破面となった椀形鍛冶滓。厚みを持つ。上面の上手側が左右方向に窪み、工具痕の可能性が高い。右側部から下手側にかけては小破面と突出部が混在する。下面は瘤状の酸化土砂のため形態が乱れている。本来の椀形鍛冶滓の右半分の破片が。
⑥⑩	椀形鍛冶滓 (中・含鉄・ 鉄床石付)	SD7 中層	8.7	7.2	5.3	610.0	4	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の椀形鍛冶滓破片。上面下手寄りには8cm大の鉄床石表面破片が二次的に固着している。滓は表面状態が全く不明。断面形からみて、深い椀形の形状を持つ滓。含鉄部は中核部と推定される。上手側側面のみが破面の可能性がある。鉄床石破片は表裏が逆転して固着する。鉄床石表面の7劃方が八本により荒れている。残る自然面は平坦な面で、鉄錆が付着する。わずかに被熱していると推定される。石質は緻密。
⑥⑪	椀形鍛冶滓 (中・鍛造 剥片付)	SD7 中層	11.1	10.5	3.6	398.0	3	なし	(仮・分析No.8)角が丸みをもった不整形三角形の平面形を呈する中型の椀形鍛冶滓。肩部が薄く左側部のみが小破面となる。上面は波状で、中央部が窪み気味。上面全体に青光りする鍛造剥片を多量に含む再結合滓が固着している。微細な鍛冶滓の破片も数多い。左側部の破面には羽口先由来の粘土質の滓が小範囲で認められる。下面は浅い皿形で、全面に木炭痕が残る。再結合滓中の鍛造剥片は鍛冶工房の床面または廃棄坑中で形成されたもので、SD7中層で固着したものと考へにくい。上面のみに再結合しており下面には全く認められない点は、廃棄状態を示す可能性が高い。
⑥⑫	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 中層	7.4	8.4	5.2	356.0	7	錆化()	表面が厚い酸化土砂に覆われた塊状の椀形鍛冶滓。側面の8割以上は破面と推定されるが、詳細は不明。上面に2箇所、新しい破面を持つ。右側部は砂質の酸化土砂が塊状に突出しており、錆づくれに取り付いたものか。下面の酸化土砂の表面に放射割れが生じている。磁着自体は上面側が強い。
⑥⑬	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 中層	9.0	8.6	2.8	273.0	5	錆化()	上面が全体にくぼんだ中型の椀形鍛冶滓。上面右手には3cm大の鍛冶滓片が載っている。肩部に小破面を持つがほぼ完形。皿状に窪んだ上面には木炭痕が並び、中には深いものもある。肩部は下手側が肥厚し、上手側に向かって薄くなる。浅い椀形の下面はほぼ全面が木炭痕。含鉄部は集中せず全体に分散気味。
⑥⑭	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 中層	6.7	8.4	2.6	139.0	4	なし	左右の側面の一部が破面となった扁平な椀形鍛冶滓。上面はきれいな流動状でわずかに中央部が窪む。上手側肩部は2箇所が突出する。下面は木炭痕によりやや凹凸が著しい。滓は比較的緻密。
⑥⑮	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 中層	5.8	7.2	2.7	104.0	1	なし	表裏面や側面が小さな木炭痕に覆われた異形の椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で左端部がわずかに高い。側面から下面はほとんど椀形とならず、全体に板状で各面の凹凸が著しい。内部にも隙間や木炭のかみ込みがある。滓量が少なく、流動性に欠けていたことによる形状が。
⑥⑯	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 中層	5.4	7.2	3.3	126.0	4	錆化()	左側面が小さく欠けている小型の椀形鍛冶滓。上手側の肩部に小破面があり、上面は浅い皿状で木炭痕が並び、下面は椀形でやや上手側が突出する。下手側の側面は木炭痕を残し厚味を持つ。上面の表皮直下に気孔が横方向に連なり隙間となる。上面下手寄りの薄い酸化土砂中には青光りする鍛造剥片が散在している。
⑥⑰	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 中層	7.5	5.6	1.7	92.5	3	錆化()	扁平な極小の椀形鍛冶滓。肩部に小破面が点在するがほぼ完形品。上面は浅く窪み、一部の木炭痕が深い。右上手側の側部がゆがんでおり、かすかに工具痕らしき凹みを残す。下面は皿状で木炭痕や木炭のかみ込みが認められる。酸化土砂中には青光りする鍛造剥片が含まれている。
⑥⑱	椀形鍛冶滓 (小・工具痕付)	SD7 中層	7.4	9.7	3.7	206.0	2	錆化()	平・断面形が異形の椀形鍛冶滓。上面右上手側が大きくえぐれており、左下手側には斜め下に向かう工具痕が残される。工具痕の幅は2cm前後。上面中央部が大きく盛り上がり、下面は全体的には椀形となるが、大きな波状をも呈する。下面の中央部は窪んでおり、そのために滓上面が突出している可能性もある。その側面上手側のみ小破面、下面上手側に半分埋まったような鉄製品の破片あり。幅4mm前後の断面方形の角棒状。鍛冶具の先端部としては細い。未製品あるいは製品か。右上手側が大きくえぐれていることと関係する可能性あり。
⑥⑲	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 中層	6.3	8.4	2.6	98.0	5	なし	(仮・分析No.9)上下面・側面ともに木炭痕のため凹凸の目立つ極小の椀形鍛冶滓。完形品。右側面に傷を持つが発掘時のものか。滓量の極めて少ない段階の鍛冶滓と推定される。鍛錬鍛冶に伴うものか。表裏面に薄く再結合滓が固着する。粉炭片や微細な鍛造剥片を含む。
⑦⑰	鉄製品 (鍛造品)	SD7 中層	4.2	1.5	1.1	30.4	4	錆化()	(仮・分析No.12)厚い酸化土砂に覆われた鉄製品。棒状または板状で、芯部には錆化した鉄製品が推定される。右側部に固着する石は酸化土砂中のもの。
⑦⑱	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	4.5	5.1	2.7	55.0	1	なし	羽口先端部の小破片。あご部に滓化・発泡した粘土質の滓が不規則に突出する。1cm前後の小範囲に通風孔部の壁面を残すが、表面が滓化して剥離気味。羽口の肉厚は3cm前後。胎土は短いスサを含む粘土質。練りが甘いためかヒビ割れが目立つ。
⑦⑲	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	4.8	5.1	2.6	48.4	2	なし	羽口先端部の小破片。肩部から基部側は欠落する。先端部は黒色ガラス質に滓化して小さな割れが生じている。通風孔部は長軸方向に向かう穿孔。胎土は粗いスサや粗粒を含んだ粘土質。構成No.⑥⑩と類似する。
⑦⑲	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	5.9	4.7	3.0	61.0	2	なし	(仮・分析No.13)羽口の体部から先端部にかけての破片。体部外面は長軸方向の帯状のケズリとナデ整形。肩部から先端部は黒色ガラス質に滓化・発泡して、半分ほどが風化した灰白色。通風孔部の穿孔方向は長軸方向。黒褐色の光沢を持つ鍛造剥片が1点固着する。胎土は大量のスサを混じえた粘土質で構成No.⑦⑱と類似する。外面の被熱痕は斜め上方に傾斜する。構成No.⑦⑱・⑥⑩と同一個体の可能性あり。
⑦⑲	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	8.6	7.6	3.3	151.0	1	なし	羽口の先端部寄りの体部破片。先端側・基部側とも破面となる。先端寄りの2cmほどの範囲が帯状に薄く滓化している。外面の成・整形は、長軸方向の帯状のケズリの後にナデ。通風孔部は斜め回転方向と長軸方向の整形痕あり。胎土は大量のスサを含む粘土質。長めのスサが目立つ。全体的に構成No.⑥⑩に似る。同一個体の可能性あり。
⑦⑲	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	7.4	10.3	3.9	259.0	1	なし	羽口の体部破片。SD7上層出土の羽口としては外径が最も大きい。外面の成・整形は長軸方向の幅広いケズリとナデによる丁寧な仕上げ。外面右端部が薄く滓化し部分的に灰黒色から灰白色に変色している。通風孔部は斜め方向と長軸方向の整形痕が混在する。胎土には長いスサを多量に含む。また、茶褐色に発色する粒子やスコリアを数多く含む。構成No.⑥⑩とは別個体。

第3章 発掘調査の成果

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
76	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 下層	5.6	9.5	2.8	181.0	5	なし	右側部が全面破面となった小型の椀形鍛冶滓。短軸側の上面肩部にも破面を残す。本来の中央部に向かって大きく窪み、瘤状の錆ぶくれが乗っている。側面はやや不規則で木炭のかみ込みが認められる。下面は浅い椀形で上手側の発達が弱い。下面中央部には粘土質の滓がわずかに残る。表面の酸化土砂中には鍛造剥片粉を含む。
77	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 下層	5.5	4.8	2.0	81.0	4	なし	側面が全面破面となった極小の椀形鍛冶滓。中核部の破片で、密度はやや高い。上面上手側には木炭痕の窪みを残す。下面は比較的きれいな椀形。表面に薄く固着する酸化土砂中には、粉状の鍛造剥片が数多い。いずれも青光りする薄手のもの。
78	炉壁 (鍛冶炉)	SD7 下層	7.1	6.8	2.2	38.0	1	なし	灰黒色のガラス化した表面を持つ炉壁片。内面には木炭痕が連続する。滓化した厚さは最大1cm弱。裏面上手部には、褐色から茶褐色に風化した粘土質の滓が突出する。炉壁胎土はスサをわずかに含まないシルト状。鍛冶炉の羽口先周辺の炉壁表面破片が。
79	羽口 (鍛冶)	SD7 下層	8.8	7.7	3.4	172.0	1	なし	成・整形や胎土が特異な羽口体部片。胎土に極めて多量のスサを混和しているためか、内外面や破面もスサ痕が目立つ。外面の成・整形は幅広い帯状のケズリによる。右半分が灰色に被熱し先端側を示す。通風孔部は基部側に向かって開き気味で、左側1.5cmほどがさらにもう一段外側に開いている。外面も全体に開き気味で、基部に向かってラッパ状に開く形態か。胎土は短いスサを多量に含み、淡赤褐色に発色する小塊状の焼土を多量に含んでいる。羽口としては古手の形態。
80	椀形鍛冶滓 (大)	SD 埋土	8.4	9.9	4.7	533.0	5	なし	厚味をもった大型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面が生きており、右下側の側面以外は破面となる。上面右側の突出部は錆ぶくれと酸化土砂。上面は全体的に緩やかに中央部が窪む。下面はきれいな椀形で、左半分の表面には淡赤褐色の鍛冶炉の炉床土が薄く張り付く。下面左端部に浅い窪みを残し、工具痕の可能性もある。滓は緻密で比重は高い。酸化土砂が厚く不明点もあり。
81	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 埋土	11.5	12.1	3.6	511.0	3	なし	右方向に牡蠣殻状に広がったやや扁平な椀形鍛冶滓。上面中央部はやや小高く、左側部から上面にかけて羽口先由来のガラス質の滓が乗る。ほぼ完形品。下面は浅い椀形で中央部がやや乱れている。下面左端部は小さく突出し、表面には粘土質の滓が固着する。上面の滓の流動性は良好で、羽口先から右方向へ向かって広がっていたことを読み取れる。表面には木炭痕が点在する。
82	椀形鍛冶滓 (大・二段)	SD7 埋土	11.9	9.8	6.8	670.0	3	なし	下面に極小の椀形鍛冶滓を残す二段椀形鍛冶滓。上面の滓が二倍ほどの厚味をもち、中心位置も左へ3cmほどずれている。上面の滓の肩部の8割以上は破面となる。また滓上面の左半分にやや粘土質の滓が盛り上がっている。滓全体の表面には木炭痕が突き刺さるように残る。上面の滓は立ち上がり急で強い椀形となる。下面の滓は扁平で左右方向に長い。滓の底面には木炭痕と灰黒色の炉床土のかみ込みが並存する。上下の滓は木炭痕の残り方が異なり、下面の滓を取り忘れたまま別工程の鍛冶処理を行っている可能性がある。
83	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 埋土	8.8	9.8	6.6	428.0	3	なし	ほぼ完形の中型の椀形鍛冶滓。厚味のあるコマ形の断面形を持つが、平面形や側面形は左側を中心に大きく乱れている。上面中央部には大きく盛り上がった瘤状の酸化土砂あり。右側面から底面は比較的きれいな椀形。部分的に二段気味となっているが、はっきりとした二段椀形とはならない。原料単位の投入が前後二時期にわかれたことによるものか。
84	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 埋土	6.4	8.0	2.6	157.0	5	なし	平面・不整形を呈する扁平で小型の椀形鍛冶滓。肩部に小破面を持つが完形に近い。上面は流動状で上手側が窪み気味。左右の側部は立ち上がりが急。下面は浅い皿状で突出部が2箇所残る。上手側が羽口先の可能性もあり。
85	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 埋土	6.0	7.3	1.7	93.0	4	なし	平板な極小の椀形鍛冶滓。短軸側の両側部に小破面を持つ。左側面上手は大きく窪む。上面の木炭痕は弱く、皿状の下面では強い。表面が発泡気味の滓。
86	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 埋土	6.7	5.6	2.7	90.0	5	なし	表裏面と側面の7割方が破面となる椀形鍛冶滓。下手寄りの上下面と側部が生きている。中型あるいは小型の椀形鍛冶滓の端部破片の可能性も残る。表裏面には木炭痕や木炭のかみ込みが目立ち、鍛造剥片もわずかに固着する。色調は黒褐色で、滓質はややガス質。
87	椀形鍛冶滓 (中)	SD8	6.0	8.5	4.6	204.0	5	なし	左側部が大きな破面となった椀形鍛冶滓。上面の中央部が径2cmほど窪んでいるのは、下面に突出する滓部と関係している可能性が高い。下面の突出部は下手側から上手側下へ向かって斜めに差し込まれた工具痕に流入した滓で、この滓の流入により上面の中央部が陥没したものと考えられる。下面の工具痕の径は2.5cmほどの不整形棒状。上面は比較的きれいな面で、中央部に向かって漏斗状に落ち込む。下面右手は通常の椀形で、表面にはかすかに木炭痕が残る。工人方向と工具の使い方をよく示す滓である。
88	椀形鍛冶滓 (中)	SD10	6.4	6.9	3.5	194.0	4	なし	表面に酸化土砂のほとんどない緻密な椀形滓破片。上下面と右側面の一部が生きており、それ以外の側面が主破面となる。上面はほぼ平坦で、一部の表皮が剥落して内部の大型の気孔が露出する。滓の結晶が発達しており部分的にキラキラと輝く。下面は不規則な椀形で、木炭痕の窪みと椀形の表面が混在する。白色の土砂が固着するが、炉床土かどうか不明。右上手側の側部に斜め方向の窪みを持ち、工具痕の可能性あり。
89	椀形鍛冶滓 (小・炉床土付)	SD10	4.4	4.2	2.3	46.8	2	なし	下面全体に灰色の炉床土の固着した椀形鍛冶滓破片。上面は生きており、側面三面が破面、上手側の側部は本来の滓の肩部となる。下面はきれいな椀形で、鍛冶炉表面の荒れの少ない段階の生成物である。本来の滓サイズは小型または中型か。
90	鉄製品 (鍛造品)	SK2	13.3	-	0.5	19.0	4	L ()	断面が円形の鉄棒をいびつな円弧状に曲げたもの。一部強く屈曲する部位がある。
91	輪状鉄製品	SK2	7.5	-	0.5	11.8	3	錆化 ()	同一個体と思われるが、全形は不明である。
92	輪状鉄製品	SK2	11.9	-	0.5	15.0	2	L ()	
93	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	13.7	-	0.5	17.4	3	特L ()	断面略方形の鉄棒を円弧状に曲げたもの。両端部を欠損する。一部に繊維状のものを巻き付けた痕跡が認められる。
94	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	17.0	-	0.5	37.4	3	特L ()	断面が略方形の鉄棒をU字形に曲げ、右側面をくびれさせる。両端は欠損し全形は不明である。
95	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	15.8	-	0.6	28.4	3	L ()	断面が略方形の鉄棒をいびつな半円形に曲げたもの。両端部は欠損する。表面には、布か繊維状のものを螺旋状に巻く。
96	鉄製品 (鍛造品) 鉋か	SK2	2.5	2.1	0.2	4.1	4	錆化 ()	上下端部とも欠損する。下部は片刃のように見受けられるが上半部は両刃とみられ、鉋の刃部である可能性がある。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑨7	鍛冶滓付鉄片	SK6	2.6	3.8	2.6	19.6	4	錆化 ()	不規則な木炭痕の残る滓に上下面を覆われた鍛冶滓付の鉄片。上手側の側部に幅1.7cm、厚さ約6mmを計る板状鉄片の錆化物をかみ込んでいる。下面は凹凸を持ちながらも椀形で、鍛冶処理中の未製品か。注目される遺物である。滓部は粘土質で、酸化防止用に表面に塗布された粘土汁の滓化したものか。
⑨8	鉄製品 (鍛造品) 鏃	SK7	10.6	2.4	0.5	36.6	4	特L ()	先端部と茎部を欠損する。鏃身は細見の柳葉形。鏃はみとめられず、両丸造。鏃身閉部は開閉で、篋被は鏃に覆われるが茎部とのさかいにわずかな段差を持つと見られる。茎部の断面形は方形である。
⑨9	鉄製品 (鍛造品) 刀子茎	SK7	6.2	1.3	0.3	9.4	3	錆化 ()	茎先端部の右側面にはえぐりかいはいる。上半部が欠損している。表面に木質などの付着は認められない。
⑩0	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SK9	4.0	5.9	2.0	66.5	4	錆化 ()	扁平な小型の椀形鍛冶滓破片。上下面の一部が生きており左右の側部が主破面。短軸側の側部も小破面を残す。左側部は削ったように弧状に欠落しており、工具痕の可能性も残る。滓はやや緻密。下面は皿状。
⑩1	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	SK9	2.5	3.6	2.1	28.0	5	錆化 ()	上手側の側部が新しい破面となった極小の椀形鍛冶滓、または鍛冶滓片。中核部に含鉄部を持ち下手側に突出している。芯部は鉄製品の可能性もある。外周部は明らかな滓で鍛冶処理中の鉄塊または鉄器の可能性が高い。側面の立ち上がり急な椀形となるのは破面の可能性も残る。錆化が進んでいるため放射割れや黒錆のにじみが認められる。
⑩2	鍛冶滓 (含鉄)	SK9	2.4	2.3	1.2	8.5	5	錆化 ()	含鉄の鍛冶滓片。椀形鍛冶滓の肩部が欠落したような形状。含鉄部は上半部。酸化土砂が錆色となる。
⑩3	鉄製品 (鍛造品)	SK9	2.6	0.6	0.6	4.2	2	なし	錆ぶくれの内部に3×4mmの断面形を持つ鉄製品を含んでいる。断面形は方形気味。完全に錆化しており、内部が中空気味。鉄釘の側部片か。
⑩4	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SK13	4.9	7.0	3.3	136.0	4	錆化 ()	含鉄の椀形鍛冶滓の中核部から側部の破片。上下面と右側部が生きており、左側部が主破面。表面の酸化土砂が厚く、不明点が多い。上面は中央部が窪み、側部は発達が甘い。下面は椀形で半分以上が炉床土の圧痕か。上手寄りの上下面に含鉄部を残す。
⑩5	鍛冶滓 (含鉄)	SK13	2.6	3.3	2.3	22.6	5	錆化 ()	小塊状の鍛冶滓片。左側部と上手側が途切れており、破面の可能性を持つ。上面には酸化土砂が瘤状に固着し、下面は浅い波状。滓としての発達弱く、隙間を持つ。
⑩6	鉄製品 (鍛造品)	SK18	3.2	0.6	0.4		3	錆化 ()	断面が長方形で、下に行くにしたがいすばまる。上下共に欠損する。鉄釘か。
⑩7	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SK22	5.9	8.9	3.2	203.0	6	錆化 ()	上手側の側部と左右の側部に小破面を残す板状の椀形鍛冶滓。右側部が二段気味で、本来の右側が大きく欠落している可能性あり。上下面はきれいな弧状で、下面は炉床土の圧痕主体。上面に酸化土砂がやや厚い。滓質は緻密。含鉄部は上面上手側付近。
⑩8	椀形鍛冶滓 (大)	G11 攪乱土	11.7	11.3	6.4	790.0	7	なし	やや二段気味の大型の椀形鍛冶滓。上面や左側部に酸化土砂が瘤状に突出する。主破面は下段の滓の右側面。上段の滓は小破面はあるがほぼ完形。上段の滓は中央部が窪み、大きな酸化土砂が2箇所瘤状に乗る。上面左寄りには椀状に窪んでおり工具痕の可能性もある。滓の厚みは上下の滓ともほぼ近似。滓の中心位置がわずかにずれており、下段の滓は上手寄りに1.5cmほど寄っている。左側部の酸化土砂の突出は、含鉄部の影響とは考えにくい。上面の滓の左下手寄りがやや磁着する。
⑩9	椀形鍛冶滓 (中)	F8 層	9.8	10.1	4.5	319.0	6	なし	ほぼ完形の中型の椀形鍛冶滓。右上手側の側部に破面があるが新しく、発掘調査時のものか。左側の側部は窪み、下面もそれに応じて凹凸が著しい。羽口先方向を示すものと推定される。上面は緩やかに窪み、酸化土砂が厚く乗る。下手側の側部が浅く椀状に凹み、工具痕の可能性もある。
⑪0	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	E8 表土	4.3	4.6	4.1	100.5	6	H ()	丸みを帯びた塊状の椀形鍛冶滓破片。側部の大半が破面か。上面はわずかに左側に傾く皿状。酸化土砂が厚く不明点が多い。含鉄部は上手側の側部下半で、黒錆がにじむ。本来の椀形鍛冶滓の中核部破片か。
⑪1	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	F9	5.0	5.1	3.2	128.0	6	H ()	含鉄の椀形鍛冶滓の側部破片。左側部と上手側が破面と推定される。上面左上手側は黒錆がにじみ、放射割れが生じ始めている。含鉄部の位置を読み取れる。下面はやや深い椀形。表面の酸化土砂が厚く不明点が多い。構成 ⑩と厚みの傾向が似ており、含鉄の状態も近似するため同種の遺物と判断される。出土位置はわずかに異なる。
⑪2	椀形鍛冶滓 (小)	F8 -5層 上面	6.4	7.4	3.3	164.0	3	なし	小型の典型的な椀形鍛冶滓。完形品。上下面や側面には不規則な凹凸があるが、椀形鍛冶滓としてのまとまりは良好。下面の大半は粉炭層に接している。上面右下手側がわずかに椀状に窪む。工具痕の可能性もあるが確定できない。滓の密度は平均的。
⑪3	椀形鍛冶滓 (小)	B7 層	5.4	5.9	3.7	93.5	3	錆化 ()	形態の乱れた小型の椀形鍛冶滓。上手側の側面は大きく欠落し、下面はゆがんだ突出部を持つ。上面中央部は窪み下面が一段と突出する。含鉄部は上面寄りに分散か。下面の突出部は工具等による変形の可能性もあり。
⑪4	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	D8 表土	3.2	4.5	1.6	32.6	6	H ()	極小の椀形鍛冶滓の1/3ほどの破片。薄い板状で上面には1箇所突出部を持つ。主破面は左側部と上手側。下手側は弧状の肩部が生きている。小さな割には含鉄部がしっかりしており、磁着も強い。
⑪5	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	D9 表土	3.7	4.6	2.5	46.4	6	H ()	上手側が厚みをもった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は左右方向に向かう浅い椀状で下手側の肩部は薄くなって生きている。右側の側部と上手側の側部が破面か。含鉄部は上手側の肥厚部。古い放射割れが認められる。
⑪6	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	F8	3.4	5.0	2.0	52.0	5	L ()	全面が酸化土砂に覆われた椀形鍛冶滓破片。平面形が楕円形で左側の側部が破面の可能性が高い。下面はやや浅い椀形。上面は平坦気味。それ以外は不明。
⑪7	鍛冶滓 (含鉄)	C9 表土	2.9	2.5	2.7	32.0	4	H ()	小塊状の含鉄の滓。表面の各所は破面主体で、椀形鍛冶滓の破片なのか鍛冶滓なのかははっきりしない。中核部は含鉄部で外周部は錆化が進む。上手側の側面はきれいな平坦面。
⑪8	鉄塊系遺物	B3 攪乱土	2.6	1.8	1.0	8.0	3	H ()	1.1cmほどの厚みをもったゆがんだ板状の鉄塊系遺物。錆化が進んでいるためか上面には放射割れが生じている。全体に磁着し、含鉄の鍛冶滓片ではないと判断される。上手側と右側面は破面か。
⑪9	鉄塊系遺物	F8 攪乱土	6.4	3.6	1.6	38.0	6	H ()	やや流動気味の外観を持つ鉄塊系遺物。右方向に伸びており、端部は丸みをもって止まっている。上手側の側部が三角形に突出する。上面は浅い皿状で下面には酸化土砂が厚い。全体に磁着するが右端部が特に強い。わずかに流動した鉄塊か。

第3章 発掘調査の成果

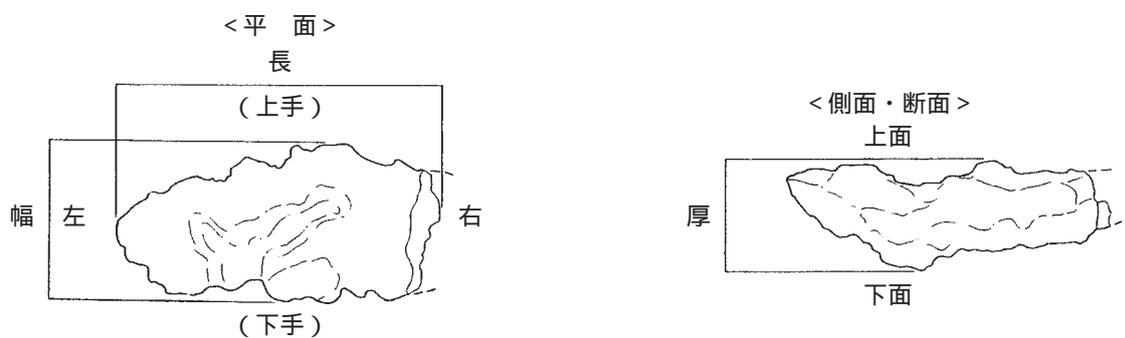
構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	
			長さ	幅	厚さ					
⑩	鉄塊系遺物	B3 攪乱土	2.6	1.9	1.2	9.6	3	L ()	1.2cmほどの厚みを持った小塊状の鉄塊系遺物。上面は緩やかな波状で、側面は立ち上がり急となる。破面の可能性あり。上手側側面には錆びくれが生じ、側面から下面には点々と酸化土砂が固着する。全体に黒錆が吹き、一部に放射割れが生じている。各面が平坦気味で、未製品の可能性も残る。	
⑪	鉄塊系遺物	E10/11 攪乱土	3.6	4.1	2.2	68.5	6	L ()	平面・不整五角形で、全面が酸化土砂に覆われた鉄塊系遺物。全体は楕円で上手側肩部はきれいな弧状となる。左側部と下手側が直線状に途切れており、破面の可能性が残る。上面右手側に突出部あり。裏面は楕円で、放射割れが発達している。鉄部主体の小型の楕形鍛冶滓、または精錬鍛冶で仕上げられた鉄塊の可能性もある。	
⑫	鉄製品 (鍛造品)	C9 表土	4.6	2.4	1.0	12.0	3	錆化 ()	⑫ 刀	別々に実測したが接合する。刀身は、錆に覆われ観察は困難であるが、反りは弱く一部に鞘の木質が認められる。切っ先はフクラが枯れ、身は鍛造である。刀身下半は欠損する。
⑫	刀	C9 表土	14.1	3.4	0.9	223.0	7	錆化 ()		
⑬	鉄製品 (鍛造品)	C9 表土	8.0	0.9	0.5	28.2	4	錆化 ()	先端部を欠損する。釘の頭は薄くたたきのばし直角に曲げられている。表面には所々に木質が付着し、その繊維方向は釘の長軸に平行する。	
⑭	鉄製品 (鍛造品)	C8 層	3.4	2.0	0.3	3.8	3	錆化 ()	鉄鍛の先端部破片。刃部は細身の長三角形で、細い逆V字状の腸袂部を持つ。茎は扁平な長方形断面を持ち、幅は約6mm、厚さは2.5mm前後と極めて薄い。茎部分の大半は欠落する。	
⑮	鉄製品 (鍛造品)	F11 攪乱土	3.1	1.5	1.0	6.0	2	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた鉄製品破片。左右の側面に鉄製品そのものの破面が露出する。右側部は長方形断面で、左側部は扁平な刃部状。刀子の茎部から刃部にかけての破片の可能性あり。	
⑯	鉄製品 (鍛造品)	E10 攪乱土	6.2	0.9	0.9	8.6	2	錆化 ()	方形断面の棒状不明品。表面は酸化土砂に覆われており、上手側は芯部が錆化して抜けている。幅は4mm前後と推定される。	
⑰	鉄製品 (鍛造品)	表採	4.8	0.8	0.8	6.5	2	錆化 ()	方形ないし長方形の断面を持つ棒状不明品。外周部には瘤状に酸化土砂が固着する。上手側の端部はやや膨らんでおり、この部分が生きているとすれば釘の可能性もある。下手側が扁平気味で、釘とすればやや異質。	
⑱	鉄製品 (鍛造品)	E9 攪乱土	3.0	1.7	0.8	9.8	3	H ()	厚さ6mmほどの鉄片状不明品。平面形は不整長方形。下手側が細くなるようにも見受けられるが酸化土砂か。上面上手には錆びくれの欠落があり、側面は直角に成形されている。何らかの未製品、または鉄製品の破片か。黒錆が吹き、含鉄H ()で、時期的に多少新しい可能性あり。	
⑲	鉄製品 (鍛造品)	B8 表土	3.7	1.7	0.6	9.1	3	錆化 ()	厚さ4mm強を測る板状不明品。上下面と右側部が生きえており、側面三面が破面。割れ口や錆化の傾向から、さらに大きな鉄製品の端部破片か。右側部は完全平坦ではなく、やや丸みを持ち、上面の中央部がわずかにたわんでいる。こちらが口縁となる容器状の鉄製品の可能性も残る。錆化の雰囲気から、時期的に新しい可能性もある。	
⑳	炉壁 (鍛冶炉)	F8 -5層	7.3	9.0	2.7	102	2	なし	裏面に鍛冶炉の炉床土を残す炉壁破片。内面は全体に溶化している。上端寄りが黒色ガラス質で、中間部は1cm大前後の木炭痕が著しい溶化面。下端部寄りは黒色から灰褐色の発泡気味の滓層となっている。裏面に残る鍛冶炉の炉壁部分は、きれいな弧状の面に沿って全面に残っている。胎土はスコリアの混じるシルト状。微細なヒビ割れが数多く走っている。羽口先下、またはその左右の炉壁破片であろう。	
㉑	羽口 (鍛冶炉)	F9 包含層	4.1	5.0	2.5	49.2	2	なし	羽口の先端部の小破片。先端部から肩部にかけては全体が黒色ガラス化し、点々と木炭痕が残る。基部側は破面で、ヒビ割れたまま使用されていたためか外面から肉厚の半分程度までが黒色ガラス質の滓に覆われている。通風孔部はわずかに残存する。先端部側からガラス質の滓が逆流気味。通風孔部の成・整形痕は長軸方向の筋状の工具痕。羽口の胎土はわずかにスサを含む粘土質で、灰色に強く被熱している。	
㉒	羽口 (鍛冶炉)	D5 表土	5.2	3.8	2.0	40.0	1	なし	羽口先端部から体部にかけての小破片。通風孔部そのものは欠落する。先端部は溶損。下に向かって黒色ガラス質の垂れが伸び、あご部にも塊状に貼り付いている。垂れた部分は完全にガラス質。表皮は黒色から明るい紫紅色。羽口の体部は最大長3.6cmしか残存しない。外面は斜めに走る8mm間隔ほどの筋目が4条残る。ケズリの単位を示すものか。先端部寄りには薄くガラス質の滓に覆われている。羽口としての肉厚は2cm以上と推定されるが、通風孔部の欠落のため不明。胎土は短いスサを含む粘土質。非常に粘りの強い溶化をする胎土である。	
㉓	羽口 (鍛冶炉)	D7 表土	6.5	6.3	2.6	92.5	1	なし	羽口体部から基部にかけての破片。基部は平坦に成形されている。体部は直線状で基部側の1.5cmほどが緩やかな段をなす。成・整形は基本的に長軸方向のケズリの後、斜め方向のナデ。基部はヘラで切り落とされている。通風孔部は基部側に向かってわずかに広がり気味。成・整形は長軸方向と回転方向のナデ。胎土は粗いスサを混じえる粘土質。通風孔部を穿孔したためか、スサ方向が基部側で折り返されている。	
㉔	土器付着滓	E10 -5層	4.5	2.5	1.8	13.6	1	なし	須恵器の外面に瘤状の黒色ガラス質滓が付着。ガラス質滓は羽口先由来のもので、構成 ㉑の一部などに似る。部分的に砂粒が残る。母体となる土器は、径の小さなつまみ付きの坏蓋と推定される。外面の風化が著しい。鍛冶の時期を示すものとするれば7世紀代となり、関連遺物の中では古いものである。	
㉕	楕形鍛冶滓 (中・含鉄)	P86	9.0	10.6	4.3	328.0	6	錆化 ()	表面状態のよく残る中型の楕形鍛冶滓。肩部に小破面が残るがほぼ完成品。右上手側の発達が弱い。上面は緩やかな皿状に窪み、木炭痕が点在する。肩部から下面にかけて木炭痕による凹凸の著しい点が特色となる。最も深いものは1.5cmにも達する。木炭の隙間に差し込んだ滓は小さな瘤状に突出している。短軸側の両側部寄りには炉床土または羽口由来の粘土質の滓が小範囲に残る。滓は比重が低く、内部にも中空部や木炭のかみ込みが多い。完全に鍛冶炉の粉炭上で形成されている。	
㉖	鉄製品 (鍛造品)	P92	9.0	2.1	0.5	11.4	3	L ()	完成品である。断面方形で、頭部は扁平に打ちのばし「く」の字に曲げる。表面に、木質等の付着は認められない。	
㉗	鉄製品 (鍛造品)	P193	5.7	0.8	0.5	19.8	3	M ()	断面方形で中程で大きく折れ曲がり、先端は欠損する。表面に木質等の付着は認められない。	
㉘	鉄製品 (鍛造品)	P198	12.8	1.2	0.6	39.0	4	錆化 ()	完成品であるが全体的に厚い錆に覆われ、形状は不明な点が多い。上部はやや幅広く扁平な形状を呈することから刃部の可能性が高いが、反りは認められない。断面系は方形と思われる。錆中には、二次的に付着したと見られる炭化した木質が付着する。	

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑩	鉄製品 (鍛造品)	P221	3.3	3.8	0.5	15.8	5	H ()	三方に突出部を持つ鉄製品。矢車状で中央部に細い孔が認められる。表面には酸化土砂が小さな瘤状に付着し、錆ぶくれや黒錆が認められる。放射割れもあり、時的には新しい可能性が高い。
⑪	鉄製品 (鍛造品) 棒状鉄製品	P226	4.6	0.8	0.3	9.4	4	錆化 ()	下部は欠損し、上部にいくに従いすばまり上部はわずかに欠損する。厚い錆に覆われ、横断面形は明確ではないが、やや扁平な形状を呈すものとみられる。
⑫	鉄製品 (鍛造品) 釘	P230	8.0	0.9	0.5	19.8	2	L ()	先端部を欠損する。釘の頭部は薄く打ちのばし、直角に折り曲げられる。表面に木質等の付着は認められない。
⑬	鉄製品 (鍛造品) 棒状鉄製品	P332	5.5	0.6	0.6	7.4	3	L ()	上下ともに欠損する。断面形は方形で、表面に木質等の付着は認められない。

凡例

・長さ・幅・厚さ

計測箇所は下図のとおりである。



東山信治編 2002 『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡(1)』 島根県教育委員会 より引用・改変して使用

・椀形鍛冶滓の分類は以下のとおりである。

(特大) 2000 g 以下前後

(大) 1000 g 以下

(中) 500 g 以下

(小) 250 g 以下

(極小) 125 g 以下

破損しているものは、完形に復元した際の推定重量で分類する。

・磁着度

鉄関連遺物整理用の「標準磁石」(外径約3cm)を使用し、6mmを1単位として資料との反応の程度を表したものである。数字が大きくなるほどメタル部分が多いことを示している。

・メタル度

金属鉄の残留の程度を示すもの。埋蔵文化財用に整準された小型金属探知器によって判定する。

特L () : 20mm大以上の金属鉄が残留することを示す。

L () : 10mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

M () : 5mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

H () : 2.5mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

錆化 () : 本来は金属鉄があったが既に錆びているもの。

なし : 元から金属鉄が無かったもの。